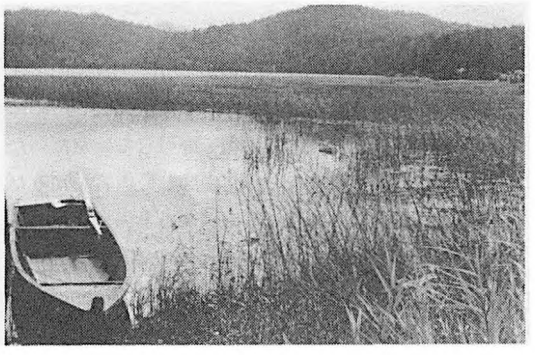
尾瀬沼のコカナダモ沼全面分布拡大

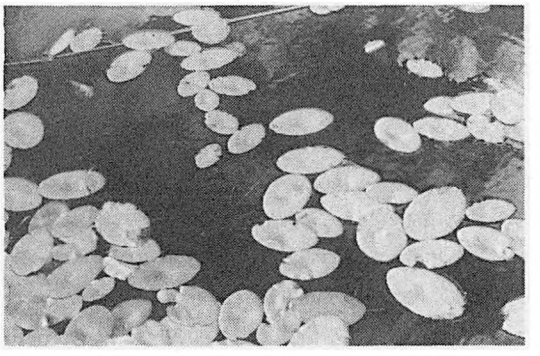
星　　一　彰

尾瀬沼のコカナダモが分布を拡大しつつあることを報告（星、1983）したが、1984年9月30日調査してみると、沼北西端の沼尻湿原船着場で、新らたに分布を確認することができた。1981年5月の発見からわずか3年5か月間に、ほぼ全面を覆ってしまったことになる。従来の水生植物分布地に着々と分布を拡大してきた。

福島市での室内実験によれば、ある種のトビケラ類が好んで食べることが確認できたので、天敵による繁殖勢力の減退も考えられるが、現在のところ、センニンモなどが駆逐されつつあり、ヒロハノエビモと競争関係に入っている。沼の生態学や風景の破壊が心配される。

（福島県立福島東高校）





写真（左）沼西北端の沼尻船着場、（右）ジュンサイ水中（黒い部分）にはコカナダモが群落を成している　（1984年9月30日）。

オニバスの結実について

—訂正とお詫び—

角　野　康　郎

この会報の前号でオニバスの結実の問題にふれて、「Okada (1930) は、展開花より生じた果実は完熟種子をほとんど含んでいないことを指摘して、オニバスの種子形成はもっぱら閉鎖花によるものとした。」と書いた（25頁）。ところが、この引用は私の誤解にもとづくものではないかという指摘を受けた。確かに私の引用は適切を欠くので、この場を借りて訂正しておきたい（なお、1930年の論文は、御旅屋太作氏との共著であって、Okada&Otaya (1930) が正しい。この点でも不注意をお詫びしたい）。

さて、Okada&Otaya (1930) は、岡田要之助博士の一連の報告である「オニバスの研究（英文）」の第6報として発表されたもので、オニバスの開花習性、展開花と閉鎖花の差異を問題にしている。その中で、オニバスの展開花はサイズの上でも胚珠の数や大きさの点でも閉鎖花に劣ることを認めながらも、次のように述べている。「……にもかかわらず、種子生産に関して展開花が不稔であるということはない。」その具体例として、展開花由来の果実が長さ17cm、幅8cm、種子98個を含んでいた場合があげられる。そして、「閉鎖花だけでなく展開花もまた、等しく完全な種子をつける」と結ばれている。この文脈からすれば、私の引用は岡田博士の主張を曲解したものと言わざるを得ないだろう。しかし、これは、展開花も完熟種子をつけることがあることが例証されているだけで、種子生産能における展開花と閉鎖花の優劣には言及されていないことも事実である。

岡田博士がこの問題について詳しくふれられたのは、『生態学研究』第4巻（1938）に載った「オニバスの開展花に就いて」と題された論文においてである。展開花（岡田博士は“開展花”と呼んでおられる）由来の果実中には発育不良の種子ばかりであった例などをあげながら、「……開展花といえども絶対に完全種子を生ぜぬとは限らぬであろうが、少くともその力が非常に弱いことは確で、従って種子を生ずるのは正常的には閉鎖花によるものと考えられる。」と結論される訳である。これが、岡田博士の最終的なお考えであったと私は理解している。